

体験の認知的構造(続)

— 具体的分析の枠組みとして —

水 島 恵 一

Structure of Feeling and “Experience as a Whole” (Continued)

Keiichi Mizushima

We have set some dimensions to analyze the structure of experience, i.e. external-internal, intellectual-emotional, conceptual-preconceptual, active-passive, more structured-less structured, etc. This schema appears to be useful to analyze and differentiate many kinds of “experience as a whole.”

Also a case analysis of counseling with this schema suggests some unique points of therapeutic process. Especially internal and passive phases of experience seem to be important for the deep and radical process for restructurization.

前論(第2号)において筆者は、体験的認知の構造を、認知心理学と現象学の接点において展開した。本小論はその構造論による諸体験事象の分析結果を、カウンセリング事例を中心に述べ、分析的構造枠の有効性を考察するものである。

前論の主旨を要約すれば、体験的認知とは全体的な過程であるが、しかし体験を科学的にとらえようとする時には、何らかの断面(軸)によって切断するほかはない。例えば、構造化の程度・意味づけという観点は、ひとつの重要な断面(切断軸)になる。また事象に能動的にかかわるときほど、体験様式としてのシエマによって取捨選択的に体験がなされ、受動的なほど、いわゆる無前提の知覚体験に近づく。さらに対象とかわる通常の外的体験の場合と、その内化を含む内的体験の場合

とでは体験様式も異なる。後者としては、知的認知地図的なものから、感情的再体験的なもの、自己像的なものなどが、異った構造をもつわけである。

さらに体験的シエマを分析する諸側面に目をむければ、知情意不可分の全体的体験的シエマ(体験様式)に対して、知的シエマ(知識の体系)と感情的シエマ(その人なりの感じ方)には、それぞれ、独自の側面がある。同様にして前概念的シエマ(例えば感覚運動的シエマ)と、概念的シエマの違いや対応性はまさにピアジェが明確化したところのものである。このほか、体験的認知を主体の働らきそのものとしてとらえた時と客観化した時の違いも無視できない。また絵的空間的にとらえた時と時間の流れの中でとらえた時の違いも無視できない。(ベルグソンやミンコフ

スキーの「持続」とは、主体としての時間的体験の相だといえる。このほかにもさまざまな切断軸が考えられ、また軸化しえない側面もあるが、前論では上述した主要な軸のみを多次元交差座標的に設定してきたわけである。

筆者らは今回、人間学的意味をもつとみなされる諸体験、およびその変化の過程をこの軸上において整理した。ここではその結果の一端を記す余裕しかないが、ある種の体験、とくにその1コマについては、座標上のひとつないし数個の象限に限定できるものである。例えば通常の主体的学問研究の体験は、対外的知的能動的（さらには概念的）象限において構造化のレベルを高めていく過程であり、研究対象、資料、文献などから離れて頭の中で整理する時には、上記が対内的象限に移行する。これに対して暗示学習体験や受動的注意集中時の直観的知覚体験は、上記を受動性に置き変えた象限においてとらえられる。一方例えば予期しない美景に接した時の感動は、対外的感情的受動的象限から出発して、構造的、知情意総合的な方向に展開するが、イメージ面接における感動ショックは、上記に対応した内的象限から出発する。

以上のような例に対して、一方例えばLSD体験などは受動的、非構造的な面が強調されるが、対外対内、知情意すべての面にわたって同時に体験が成立する。すなわち知的概念的枠組も弱まり、感情も奔流し、それが外的にも内的にもおこる。また例えば戦争体験は、被爆とその直後の体験だけをとってみても、ほとんどあらゆる象限においてとらえられ、人によって象限の強調のされ方（したがって体験の仕方や意味づけ）が異なること、時間的に変化すること、上記諸側面以外の防衛機制その他の役割も重要になること、等々の諸相を示している。

以上のように、体験そのものに特有な側面、人や状況によって異って強調される側面、変化の道すじ等を含め、体験という全体事象を

各象限から見ることによって、通常の体験記述ではexplicitにならなかった側面も照らし出されることに、われわれは注意を向けてきた。

以下本論では、心身のハンディキャップをもった人のカウンセリング過程における、体験的認知の1例を表示しつつ一般論として、主要4軸による体験の諸側面とその継起を明らかにしたい。（前述のうち、概念的—前概念的という軸については別にイメージ研究で詳述するので略す。）表は概念的表現のみを用い、横に知的—総合体験的—感情的の軸と能動—受動的の軸を組合せ、縦に対外—対内と構造的—非構造的の2軸を組合せたものである。

表の中段下段が、カウンセリング的洞察の体験であり、比較的多くの位相を示した1ケースの個人的な気持ちを例にとったものである。まず、対外的側面において、中央の体験的認知としては、障害者である自分が直面している現実をはっきり感じさせられるという体験（受動型）ないしその運命をひきうけて生きていかなければならないという実感（能動型）があげられる。これは本来的には、体験の原型であるが、一般には次に述べるように感情的混乱、防衛、構造解体などを伴う（それに直面することに耐えられない）場合が多く、カウンセリング等を経て再統合的にゴールとして結実することの方が多い。

いずれにしてもそれは、（内的コンプレックスの処理は別として）障害者の現実的自己洞察の典型である。それは障害や運命や適応手段に関する知識（左辺）および障害をもっている悲しみ（受動型）、いくらかでも安定して強くありたいという気持（能動型）という右辺の感情を含んだ全体的なものである。右辺の感情だけになってしまえば、心理治療の一過程として適切な場合もあるが、（感情や欲求自体は構造化されていても）人格的・生活的に構造化されにくく、その感情をカウンセリングの中で語っているうちに、左辺の知

表 障害者カウンセリングにおける体験の構造

	知的		(全体的) 体験的		感情的			
	能	受	能	受	能	受		
外的・社会的	<ul style="list-style-type: none"> ○障害者が差別されている社会状況の知識。 ○差別解消のイデオロギー 		<ul style="list-style-type: none"> ○同左、積極的に引き受ける。 ○同左、差別状況を変えていこうとする姿勢。それにかかわる情勢判断 		<ul style="list-style-type: none"> ○同左、それに耐え、受け容れる。 ○同左、差別状況の厳しさ、変革の困難さの実感。 		<ul style="list-style-type: none"> ○同左、何とかしたいという欲求、焦り。(体験的) ○同左、悲しみ、諦め、散発的怒り。 	
外的・個人的 (同非構造的)	<ul style="list-style-type: none"> ○実感のない知識、原因追求 ○それなりの適応手段を考える。 <p>(障害の重大さ、生活上の困難)がよく分かっていない。</p> <p>(○具体的問題解決の(漠然としたなりの)手さぐりの探索)</p> <p>(○助言の断片的とり入れ)</p>		<ul style="list-style-type: none"> ○同右、運命を引受ける態度・それなりに生きる姿勢 ○障害者である自分の直面している現実をはっきり感じ(現実受容)させられる。 <p>(漠然・断片的)</p>		<ul style="list-style-type: none"> ○運命への不満・焦り等。 ○いくらかでも安定して強くありたいという気持。 <p>(○何かにぶつかって行かなければ気がすまないような怒り、焦り。)</p> <p>(○漠然とした悲哀感、不満感等。)</p>		<ul style="list-style-type: none"> ○障害をもっている悲しみそのもの、諦め等。 	
内的・個人的 (同非構造的)	<ul style="list-style-type: none"> ○右の原因、解決手段の探索。 ○自己の知的理解、表面的知覚、理論的理解(実感なし) <p>(同上漠然)</p>		<ul style="list-style-type: none"> ○同右のままに何とかしようとする姿勢。 ○それなりの努力の姿勢を、確認 <p>○障害ゆえに苦しんできた過去の再体験。</p> <p>○自分の惨めな姿がはっきり分ってしまった。</p> <p>○ありのままの自分を受容、その自分の再認知</p> <p>(漠然、断片的)</p>		<ul style="list-style-type: none"> ○悲しみをみつめる。悲しみをおさえる。 ○勇気をふるい起そうとする。(具体性は伴わない) ○意欲がわいてくる、素直になってくる=ピーク体験 <p>(○内的にどうしようもないいらだち、絶望感等)</p>		<ul style="list-style-type: none"> ○こんなにも悲しみがあったのだ。 ○この苦しみはまさに自分の奥深いものだ。 ○漠然とした悲哀感等 	

的認知も働いて、人格的・生活的に統合されてくるものである。一方、左辺の知的極だけでは実感のない知識や課題解決的思考に終ってしまう。これは感情防衛の事態においてよく観察されることであり、右辺の感情が受け入れられて初めて全体的な中央の体験的認知が結実する。（この場合感情そのものも変化する。）ただし左辺だけで冷静に適応手段を見出すことは可能であり、必ずしも体験の実感を自分にゆるさずに、知的に困難を克服していく道は残されている。

非構造的知的体験としては、自分の障害を否認するような極端な防衛の場合を除けば、事実に障害の重大さがよくわかっていないような場合や、それに伴う生活上の困難がよくわかっていない場合の不明確な体験がある。課題解決的には具体的な問題解決の暗中模索、断片的助言に身を委ねてしまう体験などがあげられる。一方感情的には漠然とした不満感や怒り（自己の状況とはっきり結びつかない）があげられる。しかしこのような非構造的な状態では、全体としての体験や姿勢は結実しえず、あるいは断片的で一貫しない。いずれかの面における構造化を通してのみ洞察、自己確立に至ることになる。

以上は内的コンプレックスを一応無視した論議である。実際には体験は内化され、生活状況の認知地図、障害、苦しみ等々をかかえた彼特有の自己像などが構造化されており、また構造化しえない面（前述）や過去からもちこした未消化ないし未解決な問題がある。内的体験は、主としてこれらを反映している（生理的内的知覚やユングの原始心像その他の特殊な内的体験については省略する）。ここで感情に色どられた自己像に直面する体験や未消化なものの再体験がカウンセリング的には重要であるが、それは一般の神経症者や健康人の内的カウンセリング過程と基本的には異なるものではない。

筆者が検討した一般的な傾向としては、カ

ウンセリングの初期には、内的にも左辺すなわち自己の（あるいは障害の）知的理解、原因追求、解決手段の探索等々を、能動的にせよ受動的にせよ語っているにすぎない場合が多い。それ自体が非構造的に漠然としていて、カウンセラーもまずその知的明確化に関心をむけてしまうことも稀ではない。しかし、カウンセラーが体験的共感をもって臨むならば、それは次第にナマナマしい感情や欲求を伴った体験的認知へと発展していく。

その過程においては右辺すなわち感情面のみが強調されることもある。もっとも極端には、非構造的にただ意味もわからず悲しみだけがこみあげる（受動型）という場合もある。若干能動的には、内的にどうしようもない苛立ちや絶望感を抱くことも稀ではない。こうした中でピーク体験が生じ、悲しみのままに不思議と素直な気持になること、あるいは意欲が湧いてくることもあり、その後意味が構造化されてくる。（ただし表示の例では副次的である。）全体的体験としてありのままの自分を受け入れられ、それ自体がかけがえない「生かされ体験」などとして定着するとともに、能動的なそれなりの努力（ないし実存）の確認へと至る例は稀ではない。

以上は radical な治療過程として観察される様式である。しかし多くはより徐々に治療的洞察が進展するのであって、表示の例でも「自分にもこんな悲しみがあったんだ」「この悲しみや怒りはまさに奥深いものだ」という構造化された感情体験を伴いつつ、知的理解と統合されて全体的体験的理解へとすすんでいる（受動型）。あるいはより能動的に悲しみをあえて見つめたり、その悲しみを抑えて、勇気をふるい起こそうとする気持（とくに具体性は伴わない）から能動的体験的統合へと向っている。深い心理治療の過程としては、前者の受動型の方が特徴的であり、表では中央受動欄に、とりあえず再体験的に未消化なものを消化していく過程と、自己像の体験的

過程を記した。しかし受動的に結実する体験も、能動的自己探索を前提としたものであり、また潜在的にそのありのままの姿を受け入れて生きていこうとする能動態を含んだものである。

表1においては、一般論としてプロセスの主要のものを矢印で連結した。感情的混乱、非構造的漠然性、断片化、認知的防衛など、体験から目をそらす過程が、表の点線部分である。これに対して非構造から構造への実線部分と左右両辺を統合する実線部分の矢印が、カウンセリングその他の統合体験過程だといえる。同様にして防衛その他によって未消化な体験がとくに感情面を中心に内化されており、ピーク体験ないしはより構造化された感情をみつめる過程を通じて、再体験ないし自己像受容を伴った中央下段の内的洞察が結実する過程が実現される。さらにそれが外的自己洞察、生きる姿勢へとフィードバックされていくという治療過程が強調されるわけである(実線矢印)。なおこのような事例では知的側面の内的吟味の役割はそれほど大きくないが、もちろん知的、生活的現実認識の内的整合性が多く問われるケースにおいては、当然に内的知的吟味(左下)の参与する役割が大きくなる。)

以上の変化のダイナミックスに、いくつかの流れのあることに注目しておきたい。ひとつは内化の程度であり、とくに未消化な問題をもつほど、狭義の心理治療的、内的体験過程が重視される。他は、能動・受動に関するもので、比較的能動的過程においては、既にもっている生きる姿勢と表裏をなす体験様式(シエマ)をもって選択的に自己・現実を認知し、これが事実によって検証、修正されていく過程(単なる知性化や単なる感情化を統合する過程を含む)が中心であり、非構造的体験は、修正・統合されるまでの間の従的役割しかもたない。これに対して受動的過程においては、予期しないショックや受動的注意

集中によって、ありのままの知覚が優位をしめ、それ自体が強い意味体験となる。それは既成シエマの(かなり大巾な)解体に向いやすく、ときには非構造的体験を持続させる。そこで新しい構造が徐々にないし突如として結実する。これが第2の流れであるが、それはまた新たな能動的シエマ的認知・体験過程(第1の過程)へと移行していく。

能動受動に関するこの2つの流れは、構造の変化・発展において、どの程度受動的かわり方や非構造的事態を媒介にするかという程度の差ともいえる。つまり通常認知理論におけるように能動的かわりによる構造原理を中核とし、ただその変化・発展において多かれ少なかれ受動的かわり方や非構造的事態を媒介とするのだという一元的理解が可能かもしれない。しかしカウンセリングの例だけをとってみても、受動的体験の意味は、単なる媒介過程というにはあまりに重要である(本論であげていないイメージ・芸術療法的体験においては受動性やゆるい構造化がむしろ中核的役割を果しているようである。)

注)筆者がさらに(対障害者以外の)個人カウンセリング及びグループアプローチの過程を同じように整理した結果は、基本的には本論でとりあげた障害者カウンセリングの個人的認知のカテゴリー分類及びプロセス(カテゴリー間の移動)について同様の規則がほぼ確認されている。ただし能動面と受動面が不可分にしかとらえられないケース、いずれか一方のみがとくに強調されるケース、対内的過程と対外的過程の対応関係が崩れるケース、その他知的側面の役割の差、感情面と全体験面の分化の差などが認められ、認知構造の発展や再構造化の対応性がさらに印象づけられている。その中において、とくに前述した能動的過程におけるシエマの徐々に修正発展過程と受動面の強調された根本的変革過程(主として非構造を媒介とする)の差はやはり、とくに重要なようである。

カウンセリング以外の体験については、本論では、社会的体験との橋渡しの意味を含め、先の障害者の事例について、付加的に外的社会的認知をとりあげるにとどめる（表最上段。但し内的側面は省略）。それは福祉的实践において最も問題になるような認知である。個人的外的認知は、同じ障害に苦しむ仲間を見出し、社会的矛盾や福祉の要求の社会化を通じて、まさに障害者福祉のための社会的体験的認知へと広がっていく。ここでも現実によくみられる意識は、感情面を切り離れた単なるイデオロギーであったり、逆に社会的知識や思想から切り離された感情・欲求である。ただ個人的認知の場合とちがって、その感情や欲求が社会に向けられているというにすぎず、具体的方向性は持ちえない。これらが統合されて初めて体験的全体の認知となり、それは社会的状況をはっきり受けとめた上での感情や忍耐を含み、なしうる変革にも向っていく情意を含んだものである。個人的カウンセリ

ング的变化の場合に比べて、社会的知識が豊かになることによってこそ、体験的認知も洗練されてくるという違いなどは指摘しておくべきであろう。

福祉的には、表示はしなかったが、第3者（福祉的援助者を含む）の対障害者認知体験も同じようにとらえられる。ただここでは単なる知的理解（共感も行動への動機づけも弱い）が多く、内的側面や受動的側面がきわめて弱いことなどが指摘される。ナマナマしい記録に接したり、生活を共にすることによって、知情意総体として、無条件に（受動的に）、強い体験をもち、それが能動的に働く姿勢に構造化されることの（福祉・教育実践者の訓練としての）必要性を示唆するものである。

なお以上のことは、当時者、第3者を含めた社会的実践にかかわる諸々の体験、たとえば戦争体験の伝承や公害の認知に関しても同様に認められるようであり、今後のひとつの重要課題になるとと思われる。